



アルコール依存症治療における 断酒と飲酒量低減

3

仮想症例から断酒と減酒の使い分けを考える

A virtual case study : how to use alcohol reduction therapy and abstinence therapy



東京慈恵会医科大学
精神医学講座 教授

宮田 久嗣
Hisatsugu Miyata

Summary

従来のアルコール依存症治療では、主に重症のアルコール依存症患者を対象としてきたことから、どうしても断酒を唯一の治療選択肢とせざるを得なかった。しかし最近では予防医学的観点から、より軽症、より早期のアルコール依存症患者に介入し、重症化を防ぐ重要性が再認識されるようになった。加えて、近年アルコール依存症のなかには、さまざまな外傷体験（児童虐待など）や発達障害、うつ病などの精神的問題を抱えた人々があり、生きづらさを解消する手段としてアルコールを用いているという患者理解が進んできた。このため、断酒一辺倒ではない多様な治療選択肢が求められている。しかし、飲酒欲求のコントロールが困難な依存症患者に対して、断酒と減酒を上手に使い分けることは容易ではない。そこで本稿では、2018年に改訂された『新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン』を基にして、仮想症例を用いて断酒と減酒の使い分けを考えることとする。



Key Words

アルコール依存症, 断酒, 減酒, ガイドライン, 仮想症例

はじめに

最近、アルコール依存症治療にパラダイムシフト（変革）が起きている。第一に、従来の治療では重症のアルコール依存症患者を対象としてきたことから、すでに身体、精神、社会生活に深刻な影響が生じていることが多く、どうしても断酒を唯一の治療選択肢とせざるを得なかった。この結果、治療からの脱落が多く治療成績も不良であった。これに対して、最近では予防医学的観点から、より軽症、より早期のアルコール依存症患者に介入し重症化を防ぐ重要性が再認識されるようになった。第二に、従来のアルコール依存症治療

では、飲酒行動が問題化する前は自立した生活をしてきた人を前提としていた。しかし近年、さまざまな外傷体験（児童虐待など）や発達障害、うつ病などの精神的問題を抱えた人々が生きづらさを解消する手段としてアルコールを用いているという患者理解が進んできた。このため、断酒一辺倒ではない多様な治療選択肢が求められている。そのようななかで飲酒量低減（減酒）治療が、2018年に改訂された『新アルコール・薬物使用障害の診断治療ガイドライン』¹⁾で正式に採用された。